

令和7年12月6日  
<JH8CBH>

## 函館 蔦屋書店の12年、そしてこれから コンシェルジュ福島誠さんの講演

北海道新聞でJA8IRQ 福島さんの  
蔦屋の立ち上げのエピソードなどの  
講演会があるということを知り、参  
加させていただいた。

令和7年12月6日（土）午後1時  
から午後2時過ぎまで、蔦屋書店2  
階ステージ

### 1 福島誠さん

1955年札幌郡広島村（現在の北広島市）生まれ、お父さんは学校の先生で、福島少年は、小さい頃、学校を転々とした。小さな学校でお父さんがよく宿直をやっていたことなどもあり、学校の図書館の本をたくさん読んだ。中学校でも書店に入り浸っていた。高校は苫小牧。高校、下宿、本屋の三角形で生活していた。

何気なく紀伊国屋書店に努めた  
が、結果的に36年間勤めた。労働組

合をやっており、偉い人とはあまりうまくいかず、昇進は課長代理であった。

6年の科学、CQ誌などは、またラテン音楽の雑誌などはバックナンバーも含めて20年分ぐらいは収集した。

紀伊国屋書店では、社員割引があり、また、支払いも天引きであるため、どんどん本が買える状態にあった。特に発達障害系の本は、当事者意識もあり、たくさん読んだ。

55歳で定年退職後、キャリアコンサルタントなどの応募を試みたが、全てダメだった。

そんな時、函館で蔦屋書店ができることになり、応募したところ、本人曰く「変人枠」で採用が決まり、函館に来ることになった。

札幌にあった家は処分して來た。



## 2 書店に求められるもの

今は、社員ではないが、本出しなどのレギュラーの仕事をやっている。書店に届いた本は、9つに分類される。それをさらに、3000 ぐらいの棚に分けしていく。この分類が難しい。病気の本を例にとると、読むのが、患者なのか、医療関係者なのか、さらに医療関係者でも、医者なのか、看護師なのかによって分類が変わってくる。この本の分類は誰でもできるものではなく、けっこう難しいものである。

現在は、コンシェルジュという立場で、専門書の構成、在庫、イベントの企画、返品、難しい問い合わせなどを担当している。一番多いのは、「本を選んでほしい。」という要望で、複数を提案し、お客様に選んでもらう。また、書名がわかっている本を探しに来るお客様には、書店になければ、取り寄せ、古本屋を紹介、図書館を紹介などのサービスをしている。利益にならないことがあるが、また必ず来てくれると考えている。

昔の考えになるかもしれないが、「本はえらい」と思う。大先輩は本をまたいだり、踏んだりしたら怒られたものだ。本には作者の魂が込められている。

時代が変わって、だんだん本を読まない人が増えている。特に雑誌の下降割合が大きい。全国の書店数はおそらく今、1万軒を切っている。

札幌で考えても大通りの紀伊国屋

がなくなった。また、最近建つ大きな商業施設にも書店がない、レコード店がない、そのような状態になっている。

しかし、本は残る。それは、紙という扱いがってがいいこと。また、中身がきちんとチェックされていること、本当に重要なことはネットには書かれていないことなどがある。本の魅力に憑かれて一人で書店を始める人もいる。本のおかれている棚は、お客様と担当者の共同作業の場所である。双方の願いが合致しないと棚は維持できない。

## 3 薦屋書店ができるまで

薦屋書店のコンセプトは東京代官山の薦屋書店にある。そのDNAが受け継がれている。書籍、音楽、映像を扱う場。大都市ではなく人口30万人程度の街。単なる商業施設ではなく、時間、空間、仲間が集う「居場所」となるような場所。

出資は、カルチャー・コンビニエンス・クラブ(ccc)という企画会社であった。そこから梅谷（うめたに）さんが社長となり、Tさん、Sさんらと、開店に向けて計画が練られた。入社式は6月だったが、福島さんは、8月からチームに合流した。書籍チームは8名、どのような本を選ぶか、棚の配置はどうするか、入れてはいけない出版社はどこかなど、徹底して議論がなされた。アダルトやギャンブルは棚が荒れるということで、取り入れないという

のは今も受け継がれている。

10月末には、札幌の倉庫で、何全箱もの書籍の仕分けを行った。11月に引っ越し。店の中はまだ、工事中で暖房は入っていない。玄関は開け放しという状態であった。12月の開店に向けて相当な激務であった。

蔦屋書店は、若い人が責任のある仕事に就かされる。それについていけない人は辞めることになる。なかなか厳しい職場である。

#### 4 蔦屋書店の重大ニュース

- ・2012/12/5 無事開店できたこと。
- ・マルシェ広場にとても人気が出たこと。ハンサ、ぬいぐるみイベント、パン祭り、BMW、エアドゥー・ロッテチョコレートなど
- ・二階ステージでのトークショー、サイン会などが好評
- ・カルディーが2016年にオープンしたことで女性客が増えた。
- ・七夕まつりでお菓子を配ったこと（函館の企業は必須）
- ・レイトナイトトーキングが370回を数えている
- ・2018年 胆振東部地震で3日間店を閉めた（それ以外元日も含めて閉店なし）
- ・2018年 姉妹店が江別に開店
- ・蔦屋の名が入ったPEEPSは109号が最後となった
- ・2022年は、コロナでイベントが中止になった。それまで07:00～25:00の営業が、9:00～22:00となつた。

#### 5 感想

公私混同とおっしゃっていたが、楽しみながら仕事をしているのを感じた。福島さんに任せられているステージイベントなどでもその方向がうかがえる。私たちアマチュア無線も好意的に扱っていただいている。また、電子工作、ラテン音楽、サルサなども行っている。また広い人脈を生かして、ステージで講演をもらったりもしている。福島さんのステージのお話で心に残ったのが、函館東高校の校長であった森武先生の出版記念の講演の話。当時すでに末期がんであったが、福島さんの誘いを快諾し、車いすでステージに上がった。平日にもかかわらずかなりの卒業生が駆けつけた。先生は、その年の12月に亡くなったというお話。亡くなつてから、榮誉を称えるより、生きているうちにできることを、という思い出、森先生も幸せな思い出ステージに上がったのだと思う。

世の中、これはいい、これはだめという暗黙のルールがあり、これは、絶対無理というやる前から結論が出たように言われることも多い。福島さんのお話を聞いて、そこを打ち破っていくことも大切なかなあと思った。福島さんのお話を聞いて、生きている間はやっぱり悔いを残さないようにやろうと思ったことは挑戦していく人生が楽しいのかなあと思った。2025/12/06 執筆